

本報告では、大正時代の帝国大学における個別宗教研究の事例として、京都帝国大学基督教講座の設立経緯をたどり、初代教授となった波多野精一が「基督教」としてどのような営みを構想していたのかを検討した。その結果、以下の三点を指摘した。

第一に、私立大学だけでなく、帝国大学もまた、国の文教政策と宗教が折衝しあう前線であったこと。一九二〇年に申請され、一九二二年に発令された京都帝国大学基督教講座の設置は、一九一六年に東京帝国大学で印度哲学第一講座が安田善次郎による寄付講座として設置されたことを意識したものであった。東京帝国大学ではその後、一九一九年に神道講座が官費で設置され、一九二一年に釈宗演の寄付により印度哲学第二講座、一九二六年には官費により印度哲学第三講座が設置される。一方、京都帝国大学でも一九二六年に官費により宗教第三講座（仏教学）が設置された。これは文部大臣から京都帝国大学の総長に対して働きかけがあったもので、当時の文学部の教授たちには、仏教学講座は国家の思想善導政策の一環として設置が要求されているという見解が共有されていた。

第二に、京都帝国大学基督教講座は、「神学講座」という名称になった可能性と、逆に、そもそもキリスト教研究のための独立した講座の設置が認められなかった可能性の両方が想定しうること。一九二〇年に同志社大学が大学令による「大学」へと昇格した。この際、神学部の設置は認められず、宗教の研究は人文学の他の研究との関連の中で進められるべきであるとの文部省の判断から、文学部の中に神学講座が設置された。京都帝国大学に設置された基督教講座はこの路線に合致するものであり、「神学」という名称が忌避される理由は見当たらなかった。もしも新講座の申請が同志社と同じくらいに早く出されており、誰も「基督教」という語を思いつかなかったとしたら、京都帝国大学に神学部が設置されたかもしれない。もしそうなら、日本の神学の領域はより広いものとなり、日本の神学における学問的な視点と実践的な視点の緊張はより高いものとなっていただろう。一方で、一九二二年に立教大学が昇格した時には、文部省の判断は変化しており、文学部内の神学講座設置も認められなかった。もしもこれ以降に基督教講座の設置が申請されていたなら、立教大学とは異なりすでに宗教学講座を持っていた京都帝国大学には新たな講座設置が認められなかった可能性も考えられる。

第三に、波多野は基督教を「神学」とは区別せず、キリスト教的敬虔を学問的方法によって表現する営みとして構想していたこと。波多野は基督教講座のための講義において初期キリスト教を論じた。ドイツのプロテスタント神学における宗教史学派が波多野の初期キリスト教についての講義に大きな影響を与えていることはすでに知られている通りである。宗教史学派はキリスト教の研究に教義学的方法ではなく、歴史学的方法を徹底的に適用した。波多野にとつては歴史的方法によるキリスト教研究が「神学」と呼ばれることに疑問はなかった。そもそも、宗教研究が根本的に宗教体験に基づかなければならないと波多野は考えていた。波多野にとっては、キリスト教的生が宗教体験をもたらすものであった。この視点からすると、波多野が自分の後継者がキリスト者であることを前提していたと考えることには道理がある。もちろん、キリスト者であることは必要条件であって、それだけで良い訳ではない。他の条件として波多野が基督教講座の構成員に要求したのは、学者としての誠実さであった。とはいえ、この二つの条件は別の事柄ではない。なぜなら、波多野は研究と信仰を内面的に結びつけていたからである。学者として誠実であることは、キリスト者として誠実であることを意味していた。